

〔翻 訳〕

ババッド・タナ・ジャウイ (9)

第5部 ババッド・マタラム 3

深 見 純 生 訳

訳 者 序 言

本号はババッド・マタラムの3回目（第61～68章）で、スルタン・アグンの末年から、これを継いだマンクラット1世（位1646～1677）の治世末年までである。様々な王国崩壊の予兆が語られ、ついにトルナジャヤ叛乱（1675～1679）が始まる。

解 題

(3) バクアラム版『ババッド・タナ・ジャウイ』（NBS 216）

ラスによれば、以上の他にも大ババッド・グループに属するテキストがいくつかある〔Ras 1987b: XIX-XXI〕。その中でもとくに重要な3点を取りあげておきたい。

第一に、レイデン大学図書館でNBS 216という整理番号をもつ『ババッド・タナ・ジャウイ』である。NBSはオランダ聖書協会 Netherlands Bible Society（オランダ語名 Nederlands Bijbelgenootschap）であり、同協会の文書がレイデン大学図書館に寄託されていて、ピジョーの『ジャワの文献』

キーワード：ババッド・タナ・ジャウイ，マタラム，マンクラット1世
トルナジャヤ，マドゥラ

にはそのうちの約160点があがっている [Pigeaud 1968 2: 712-755]。

NBS 216 はジョクジャカルタ書体のジャワ文字による散文版であり、2巻からなる。第1巻(1528頁)はパジャジャランの建国に始まりパクブウォノ1世(位1703~1719)まで、第2巻(490頁)はその後のカルタスラ、スラカルタ、ジョクジャカルタの歴史であり、イギリス支配期(1811~1816)におけるパクアラム王家の設立(1813)までを扱い、未完である [Pigeaud 1968 2: 750; Ras 1987b: XIX-XX]。スギアルトによるローマ字版およびオランダ語による梗概が作成されていて、これにはレイデン大学図書館の LOr 10.726 という整理番号が与えられている。第1巻は500頁、第2巻は327頁である [Pigeaud 1968 2: 660]。

始まり方が大ババッドとちがってパジャジャラン建国からであり、ワトゥグヌン王の物語(第2章)は含まれず、シユン・ワナラの物語(第4章)は含まれるという。また同じ始まり方をする作品がスラカルタ王家にも存在すること(ラドヤ・プスタカ Radya Pustaka 博物館の RP 128, マンクスゴロ王家図書館の RPB 36)が明らかにされており [Ras 1987b: XX]、そのインドネシア語訳が出版されている。

(4) ジョクジャカルタ版ババッド・クラトン Babad Kraton

諸写本の詳細な比較に基づく文献学的研究は遅くとも1970年代にはリックレフス [Ricklefs 1972; 1979] やデイ [Day 1978] などによって始まっている。その際リックレフスがとくに注目したのが大英博物館所蔵のババッド・クラトンであり (Add. MS. 12320)、あわせて断片的ではあるがインド館 India Office 図書館の手写本である (IOL Jav. 36 A)。ババッド・クラトンは、1777年にジョクジャカルタ王宮において完成したもので、完全な『ババッド・タナ・ジャウイ』としては最も古い写本であるという。すなわちその内容はアダムから始まりカルタスラの陥落(1743)に至るものであり、バライプスタカ版の全部(第1~31分冊)および大ババッドの第1~

234詩章と総体として一致するという〔Ras 1987b: XX〕。ローマ字転写版が刊行されている (Pantja Sunjata 1992)。

(5) サジャラ・ラジャ・ジャワ Sajara Raja Jawa

ラスはババッド・クラトンより古いものとしてサジャラ・ラジャ・ジャワをあげている。翻訳官ホルデイン Gordijn が翻訳し、その冒頭部分をイパーレンが刊行したという〔Iperen 1779〕。その原本はホルデインがスラカルタにおける彼の先生ストラパナ Sutrapana から1750年に購入したものだが、現在は所在不明である。ホルデインはキヤイ・アグン・セラ (第24章) まで翻訳したが刊行されたのはウダラのクディリ国守任命 (第9章) までである。ラスによれば、刊行された部分について検討すると、この作品と大ババッド、メインスマ版、ババッド・クラトンの4者の物語展開は驚くべき一致を示していて、したがって1750年にはこれらの共通の祖形というべきものが存在したことになる〔Ras 1987b: XX-XXI〕。

参 考 文 献 (追加分のみ)

- Day, A. 1978: “Babad Kandha, Babad Kraton and variation in modern Javanese literature”, *BKI* 134-4: 433-450.
- Iperen, J. van 1779: “Begin van eene Javaansche historie, genaamd Sadjara Radja Djawa”, *VBG* 1: 134-172; 2: 262-288; 3: 117-133.
- Pantja Sunjata, Ignatius Supriyanto and J. J. Ras 1992: *Babad Kraton: Sejarah Keraton Jawa sejak Nabi Adam sampai runtuhnya Mataram menurut naskah tulisan tangan The British Library, London Add 12320*, Djambatan.
- Ricklefs, M. 1972: “A consideration of three versions of the Babad Tabah Jawi”, *BSOAS* 35: 285-315.
- Ricklefs, M. 1979: “The evolution of Babad Tabah Jawi texts: In response to Day”, *BKI* 135-4: 443-454.
- Soewito S. 1979: *Babad Tanah Jawi (Galuh Mataram)*, np (Delanggu?).

ババッド・タナ・ジャウイ (9)

第5部 ババッド・マタラム 3

目次

61. スルタン・アグンのララ・キドゥルとの邂逅
62. スルタン・アグンが死に、マンクラット1世が即位
63. アリット君が兄王マンクラット1世に叛く
64. ウィラグナ公がブランバンガンと戦う
65. 庭師が殺されその血が毒に変わる。王様の横恋慕
66. 雌鳥が雄に变じ、王様に献上される
67. スラバヤの姫オイの騒動
68. トルナジャヤがサンパンに戻り、マタラム攻撃を準備する

61. スルタン・アグンのララ・キドゥルとの邂逅

あるときスルタン陛下は庭を散策しておられた。柄がウルグヤシの木の短槍をもつ侍女がつき従っていた。その庭にはたいへん獰猛な雄鹿が飼われていて、鹿は陛下を見ると噛みつこうと突進してきた。陛下はとっさに槍をとり鹿に突きだされ、胸に刺さり、血が吹き出した。鹿の突進の速さと陛下の力強さのため、ウルグヤシの柄は折れてしまい、鹿の角が陛下の太股に当たった。しかし陛下は傷つかず、鹿は死んだ。こうしてスルタンは誓いをお立てになった。「将来余の子孫はウルグの木の手柄を用いてはならない。不運のもとになる」

さて、このスルタンは王宮をふたつおもちで、ひとつをクルタ Kerta の町といい、ひとつは南海にあった。そのララ・キドゥルがスルタン陛下に嫁していたからである。陛下はいつも南の海に宿下がりをなさった。そして

スルタン陛下が謁見のためお出ましになる時には、ジンたち、プリたち、ブラヤンガンたちが伺候した。しかしこれらが見えるのは陛下だけだった。そのうえ、スルタンは並外れて霊力が高く、強い威信の主であるのは周知のことであり、人間の臣下たちからも、ジン、プリ、ブラヤンガンたちからもはなはだ畏怖されていた。

62. スルタン・アグンが死に、マンクラット1世が即位

スルタン陛下には2人の王子があり、兄はパンゲラン・ディパティ・アルヤ・マタラムといい、すでにパンゲラン・プキックとラトゥ・パンダンの間の姫を妻としていた。弟はラデン・マス・アリット、一名パンゲラン・ダヌバヤ Danu-Paya といった。

すでに2人の子があつて、スルタン陛下は病いが重くなり、妻子たちや一族の者たちが控えていた。陛下はパンゲラン・ブルバヤに申された。「ブルバヤ伯父上、まもなく余は定めるときを迎えます。余の遺言は、長男パンゲラン・ディパティ・アルヤ・マタラムが余を継いで王となるのがふさわしく、次男には良き境遇を享受させたい。そなたの孫たる我が子たち、伯父上、そして我が親族すべてをそなたが導くことができますよう。後をよろしく頼みますぞ」。こうしてスルタン陛下はお亡くなりになった。嘆き悲しむ声がクラトンに満ち満ちた。ムラピ山が雷鳴のような唸りをたて、暴風雨の音と混ざりあった。遺体は清められ礼拝をうけ、マギリ Magiri に運ばれ埋葬された。1578年であった。

月曜日パヌンバハン・ブルバヤは孫の手を取って外に出てきて、シティンギルの玉座に座を占めさせた。マタラムの家臣はみな参上していた。パヌンバハンは声を張り上げた。「聞け、マタラムのみなもの者、みな証人たれ。わしはパンゲラン・ディパティ・アルヤ・マタラム様を、ススフナン・マンクラット陛下セナパティ・イン・アラガ・ガブドゥル・ラフマン・サ

イディン・パナターガマの名の下に、亡き父上を継ぐ王位に就ける」。マタラムの家臣たちは声を揃えて賛意を示し、そしてパンディタたちやハジたちは賛同の祈りの言葉を唱えた。こうして王様は王宮にお戻りになった。この王様の治世に国はおおいに繁栄し、裁きはいつも公正に行われ、お上の命令は混乱することなく、亡き父王の時と同じであった。

木曜日に王様は謁見にお出ましになった。王族たち、ブパティたち、マントリたちがすべて揃って伺候し、王弟のアリット公もまた伺候しておられた。王様はブパティたちと王族たちにお話しになった。「わが臣下の皆のもの、レンガを焼け。余はカルタの町から離れたい。父上の旧居に住み続けたくない。余はブレレッドに都を作ることにする」。家臣たちはみな心得ましたと答えた。

王様はさらにキ・トゥムンゲン・ウィラグナとトゥムンゲン・ダヌパヤにご命令になった。「その方らはブランバンガンに進撃せよ。そこはバリ人に奪われたので。そのブパティはすでに降伏してしまった。その方らに外領の全軍を与える。トゥムンゲン・マタラムは同行し、パシシル勢を指揮して海路を行け。しかし、サンバンの国守は同行させず兵士を出させるだけにせよ」。ウィラグナ公、ダヌパヤ公、マタラム公は御意のままにといい、軍を率いて出立した。

63. アリット君が兄王マンクラット1世に叛く

王様の弟君パングラン・アリットはまだ結婚前の若者だった。彼には2人の守り役がいて、ともにブパティの地位をもち、一人はトゥムンゲン・ダヌパヤといい、その時ちょうどブランバンガン遠征に出ており、一人はトゥムンゲン・パシシガン Pasingan といった。アリット君はまだ若かったので、ダヌパヤ公の屋敷に住んでいた。若君はその時ご自分の住いにあって、パシシガン公とその息子アグラユダ Agra-Yuda が訪ねてきた。パシ

シンガンは跪拝して話しかけた。パシシンガンとアグラユダは若君を王位に就けると請け合い、煽りたて、悪事を唆した。パシシンガンの言うところでは、マタラム人にはあなた様を応援すると約束するものが多い。くわえて、いまマタラム人はみな町の建設に従事しているので、クラトンは静かで、誰もいないことが多い。クラトンの中が静かな時に、パシシンガンはこれを奪い取ると保証した。アリット君の返事は、まずよく考える、そして父なるダヌパヤ公の戻りを待つというものだった。パシシンガンは説得し続け、あれこれ多くのことを語り、そして若君のルラ lurah〔長〕たちは相談に与かるとパシシンガンの言葉を支持した。王子はしだいに心を動かされ、多数の意見に飲み込まれた。ついにこう述べた。「かくなる上は、従うこととしよう。わしが王位を奪うことをマタラム人が本当に支えてくれるなら」

パシシンガンとアグラユダは準備を整えるため辞去した。屋敷に戻るとパシシンガンはアグラユダに指示した。「おい、お前は明日武装した者を集めよ。わしはまず最初にレンガの作業場に行き、レンガを積んでいるマタラム人の様子をよく見る。ふつうは仕事をやめるのはまだ明るいうちだ。そこで働いている者たちがみな家に帰ったら、わしはお前に伝令を出すので、お前は武装した者たちと一緒にやってこい。そしてクラトンを襲うのだ」。アグラユダは承知した。

その時プルバヤ侯はすでに事を知り、王様に報告した。王様はたいへん驚かれた。そしてプルバヤ侯に、パシシンガンが工事の場にきたら殺すよう命じられた。侯は「御意のままに」とお答えした。翌朝プルバヤ侯は先んじて工事現場に行き、マタラム人みなに指示を与えた。まもなくパシシンガンが現れ、みなに突きかかれて死んだ。家来たちは逃げて、アグラユダに父上が殺されたことを伝えた。アグラユダはこれを聞くと涙を流したが、槍を担いで馬に乗った。家来たちに出撃が命じられ、出発した。し

かし家来たちは逃げてしまい、アグラユダは1人になってしまった。勤番所までやってきたが、ここに大勢が待ちうけていた。アグラユダは一斉に包みこまれて殺され、首が刎ねられた。

プルバヤ侯は王様に、パシシガンとアグラユダをすでに殺したことを申しあげた。2人の首が差し出された。王様は直ちに謁見のために外にお出ましになり、マタラムの家臣たちはみな揃っていた。王様は侍女にお命じになった。「その方、余が弟バンゲラン・アリットを呼べ。余に代わって都の造営を監督することを命じるとな」。侍女はただちにダヌパヤ公の屋敷に向かった。アリット君はこの命令を聞くと、すぐに拝謁に向かった。

王様の前に現れると、パシシガンとアグラユダの首が投げつけられた。そして王様は申された。「これがお前を王位に就けようとした者の末路だ」。アリット君は素早くクリスを抜くと、2つの首を刺して、こう話された。「パシシガン、お前はなぜわしを巻き込んだのだ」。王様は穏やかに申された。「それはどういうことかな、弟よ」。アリット君は跪拝してお話しになった。「兄王様、あなた様に齒向かおうとか、あなた様が国王であられることをうらやむだとか考えたことは一瞬たりともありません。まったく不満をもったことはありません。これはもっぱらパシシガン1人の策略です」。王様は弟君の言葉に同情を覚えられ、穏やかにお命じになった。「もしそのようなことなら、弟よ、お前の臣下のうちルラの地位の者をすべて余に引き渡すのじゃ。すぐに連れてこい。余はシティンギルで待つ」

アリット君は「かしこまりました」と答え、王様の前から下がった。屋敷に戻ると家来たちはみな揃っていて、その数は300人に上った。内庭にはルラ8人、ほかに世話役2人、女歌舞の男芸人1人もいた。若君はお命じになった。「者ども、ルラたちよ、さあ、わしはお前たちみなを縛り、すぐに兄王に引き渡す」。ルラたちはみな泣きだし、そして若君の足許にしがみついた。内庭の外にいた者たちも泣き声を聞いて中に入ってきて、

つられて泣いた。口々にあれこれご主人様に語りかけ、そして煽り立てた。アリット君は家来たちを見ていて同情を覚え、しだいに気分が高揚してきた。こうして武器を取るよう命じられ、家来たちはみなすぐに武器を取った。

そこに王様から督促の使者がきた。キ・スミングット Sumengit とキ・ダカワナ Daka-Wana といった。ダカワナは外に留まり、スミングットだけが中に入り、殺された。ダカワナはこれに気づくと急いで戻り、王様に事態を申しあげた。王様はダカワナの報告を聞くととても驚かれ、そして涙をこらえられた。プルバヤ侯は静かに申しあげた。「陛下、弟君が寿命をまっとうなされないのは、アラーの思し召しによる宿命であります」。王様は厳しくお命じになった。「おい、マタラム人たちよ、まもなく弟が攻めてきても、歯向かってはならぬ。たとえ大勢が殺されようとも、余の前にくるよう、道を譲るのじゃ。もし敢えて奴と戦う者があれば、きっと余がその者の首を刎ねる」

プルバヤ侯はアルンアルンに行きこれを布告した。そこにたちまちアリット君が家臣を率いてやってくると、勤番所で立ち止まり、味方すると約束したマタラム人の現れるのを待った。いくら待っても誰もこず、家来たちも逃げて少なくなり、6人のルラだけが残った。アリット君は死を覚悟したが、マタラム人はみな左右に道を開けた。サンパンの国守のドゥマン・ムラヤ Melaya があたふたと駆けつけてきて、若君の足許にしがみつき、欲望を押さえ、攻撃を断念なさるよう申しあげた。アリット君は心が昂っていて、サンパン国守はクリスで首を刺されて死んだ。王子のクリスはセタンコバル Setan-Kobar という名であった。サンパン人たちは主人がアルンアルンで死んでいるのを見ると、こぞってアリット君に襲いかかった。しかし傷つけることはできず、多くのサンパン人が王子に殺された。6人のルラはすでにみな殺された。アリット君は疲れたため、自身のクリスで

勢い余り太股にほんの小さいかき傷をつけた。王子は2本のワリングン樹の下で死んだ。諸公たちはただちに王子の遺体をシティングルに運んできた。王様は弟君が死んでいるのを見て甚だ深く悲しまれた。母君は息子に取りすがって泣き叫ばれた。王様は誰が弟を殺したかお尋ねになった。諸公は事の始終を申しあげた。王様はこう申された。「余の弟はまだ若くしてすでに不屈であった。そして、弟は、自ら殺されたサンパン国守と多くのサンパン人たちに死をもって続いた。見よ、マタラム人たち皆のものよ、余の証人たれ、余はいま弟の死を悼む」。こう言うや王様は左の二の腕に切りつけ、傷は深く血が流れた。

さて、今や王様は左の上腕に傷跡をもっておられる。これこそ先にシラロン公に殺されたブランバンガン山のアジャルの化身であった。アリット君の遺体はマギリに葬られた。

王様は王宮をプレレッドにお遷しになった。

64. ウィラグナ公がブランバンガンと戦う

さて、ブランバンガンに出征したのはキ・トゥムンゲン・ウィラグナとキ・トゥムンゲン・ダヌパヤ、そしてキ・トゥムンゲン・マタラムであった。ブランバンガン王国はすでに征服され、その国守はバリに逃亡した。ブランバンガンの人々は男女ともマタラムに連行され、その数は1500人に上った。ウィラグナ公はバリへ追撃したが、海を渡ることができず、海岸で止まった。これを見たバリ人は攻撃しようと海に乗り出した。しかしマタラム公に海上で攻められ、多くのバリ人が死に、ついに敗走した。

ウィラグナ公、ダヌパヤ公、そしてマタラム公はこうしてマタラムに引き上げた。ウィラグナ公はその道中に病気になる、亡くなった。ダヌパヤ公は、アリット君が亡くなったという知らせを聞くと、毒をあおいで死んだ。ウィラグナの死が王様に伝えられると、その子と孫12人も死を賜るこ

ととなった。ブランバンガンの捕虜はすべてタジに留めおかれた。

65. 庭師が殺されその血が毒に変わる。王様の横恋慕

パンゲラン・シラロンの物語に戻る。スルタン・アグンのみ世だが、シラロン公は王宮のプンドボで宿直していた。その時庭師が王様の逆鱗に触れ、短槍で突かれて胸に傷を負い、血が地面に滴り落ちた。庭師の遺体は消えてなくなった。スルタン陛下はシラロン公に血を捨てるようお命じになった。シラロン公は血をすくい取ってバナナの葉の容器に入れ、血の落ちた土もそぎ取って容器に入れた。朝になってシラロン公は帰宅し、食事を取った。一掴みの飯にその血を滴らせて犬に与えた。犬はすぐに死んでしまい、その体はたちまち分解してしまった。その血をココヤシ油と混ぜ、それを屈む毒と名づけた。誰かを嫌悪する者がシラロン公に手だてを乞うとこの屈む毒を与えられた。これを盛られた男は死んだ。やがて屈む毒に対抗する方策を乞う者があり、シラロン公からそれを与えられた。それは血の落ちた土だった。これを与えられたのはキ・チラ Cira という者だった。屈む毒を飲まされた者がいると、キ・チラの治療を受けて回復した。このことはやがて町中の人に知れ渡り、スルタン陛下のお耳にも達した。シラロン公はナラダナ Nala-Dana 村に追放になった。スルタン陛下に傷跡ができた時、再びシラロン公が人々の口にのぼり、その噂はスルタン陛下にも聞こえてきた。こうしてシラロン公は死を賜った。このことは、先にシラロン公に殺されたブランバンガンの賢人の呪いが本物であったことを示している。

ある時王様は側室にする美女を捜すよう命じられた。マタラムの町に住むワヤン・グドッグ wayang gedhog [パンジ物語のワヤン] のダランのキ・ワヤ Wayah という者にことのほか美しい娘がいるが、娘にはすでにキ・ダルム Dalem という夫があると言う者があった。これが王様の耳に入る

と、お召しになった。しかし女はすでに妊娠2ヶ月だった。王様は女を見てとても気に入り、内廷にお入れになった。

王様は他の側室を忘れるほどこの女に夢中になり、ラトゥ・ウェタン Wetan〔東の女御〕という称号をお与えになるほどであった。しかし世間は彼女をラトゥ・マラン Malang〔障りの女御〕とよんだ。やがて身ごもっていた女は男の子を産んだ。王様の寵愛はますます深くなった。そしてその夫ダルムに死を賜った。ダルムが死ぬとラトゥ・マランは悲嘆に明け暮れた。愛したのはただ1人キ・ダルムだった。日夜ひたすらダルムを思い泣き暮らすのだった。まもなくラトゥ・マランは病気になる、嘔吐と下痢を患い亡くなった。

ラトゥ・マランの死後、王宮のすべての侍女が、大奥の前庭の竹囲いに閉じ込められた。その理由は、ラトゥ・マランが病気の時にひたすらダルムを呼び続けたので、王様はラトゥ・マランの病は宮廷のみな仕業とお考えになったからであった。ラトゥ・マランの遺体はクリル Kelir 山に運ぶよう命じられたが、埋葬は許されなかった。王様が狂わんばかりに惚れ込んでいたためであり、王様は日夜ラトゥ・マランの遺体をその子とともに見守られた。王様の家族やブパティたちが王宮に戻られるよう勧めたが、王様はそれを望まれず、そのためマタラムの国中に動揺が広がった。その後間もなく王様はそこで寝ているときに、ラトゥ・マランが夫ダルムと一緒にいる夢を見られた。眠りから覚めた王様は、ラトゥ・マランの遺体が高麗の形を失っているのをご覧になった。こうして王様は王宮にお戻りになり、ラトゥ・マランの遺体の埋葬をお命じになった。1578年のことであった。マタラムの人々は落ち着きを取り戻した。

66. 雌鳥が雄に变じ、王様に献上される

その時王様はすでに5人の子をおもちで、すべて王子だった。長男はス

ラバヤの姫との間の子で名をパンゲラン・ディパティ・アノム Anom といひ、王位を継ぐことになっていた。4人の弟とは腹違いであった。2番目の王子はパンゲラン・プグル Puger, 3番目はパンゲラン・シンガサリ Singa-Sari, 4番目はパンゲラン・マルタ・サナ Marta-Sana, そして末子はデン・マス・タパ Tapa といった。

さて、スラバヤのパンゲラン・プキックは孫のアノム王子と同じ館に住んでいた。プキック公夫妻は孫をととても可愛がっていた。その時プキック公は野鶏と交雑した雌鳥をもっていた。まだヒヨコの時から飼っていた。やがてそれは姿形のよい雄になり、鳴くことができた。プキック公はとても驚き、それは珍奇なことなので、この鶏を王様に献上すべきであると考えた。こうしてプキック公は鶏籠を白い絹布で覆い、王宮に参上し、作法どおりに王様の前に座った。プキック公は鶏を差し出して、これは以前は雌鳥でしたが今は雄鳥になりました。クラトンにおくのがふさわしいでしょうと申しあげた。

王様は鶏を受け取り、外見は喜び驚いてみせたが、内心では激怒しておられた。というのも、すっかり疑い深くなられた王様は、裏の意味を読み取るのが巧みになっていたのだった。いま王様は心の中でお考えになった。叔父上は、娘が王妃となり王子パンゲラン・ディパティ・アノムを設け、これがすでに成人したので、自分が退位して王子を即位させるよう合図を送っていると。王様はこう考えると、叔父に帰宅を促された。プキック公が退出すると、姿を見せた廷臣たちに、さきほど叔父は悪意のあるほのめかしをしていったとお話しになった。そして叔父を不作法な老人とお呼びになった。王様のこの怒りは広く知られるところとなった。プキック公の耳にも入り、とても残念でまた恐れを抱いた。そこで2本のワリンギン樹の下で妻と一族こぞって全身白衣を着て座り、静かにお召しを待った。王様はちょうど謁見のためシティンギルにお出ましになり、ラトゥ・マラン

が産み養子とした子にパンゲラン・ナタブラタ Nata-Brata の称号と名前をお与えになった。

その時多くの者が座っているのが目にとまり、調べさせてスラバヤ公夫妻と一族であるとわかったと、王様はただちにシティンギルにくるようお召しになった。こうしてプキック公はシティンギルに上がり、妻は後ろに従った。見守る者はみな悲痛な想いだった。王様は叔父と叔母がやってくるのを見て玉座をお降りになった。叔父と叔母に自分と同じ床に座るようお勧めになった。王様はあそこに座していたわけをお尋ねになった。プキック公は忠誠の誓いを述べ、そして先に交雑種の鶏を献上したことには何かの意図を包んでいたり、遠回しに言うようなつもりはまったくなく、反抗する気もなく、先を見通すような考えもないことを申しあげた。プキック公と妻は、もし王様がお許し下さらないのならば、死を賜りたいと申しあげ、こうして2人は涙を流し頭を深く垂れた。叔父と叔母の言葉をお聞きになった王様もまた、亡き父上を思いだして涙を流された。近くに侍っていた者たちもまた、スラバヤ公に同情してみな涙を流した。

王様は涙をぬぐいながら申された。「叔父上、叔母上、あまり思い詰めないで下さい。私は怒っていませんし、もうすでに貴方がたを許しています。くわえて、叔父上、将来、私が死んだら、貴方の孫がきっと私を継いで王位に就くでしょう。しかしながら、王宮の所在はマタラムではありません。貴方の孫はワナカルタにクラトンを設けるでしょう。ここはというと、王位に就くのは私が最後なのです」。プキック公は答えられた。「アラーに懇願申します、また神の預言者にも、ここマタラムの国が不変でありますように、王位に就くのは陛下の血を引く者でありますように」。王様は応じられた。「叔父上、すでにアラーの思し召しによる宿命なのです、貴方の孫のアノムのゆえにマタラムの国が没落するのは」。プキック公には王様の予言はたいへん残念なことであった。プキック公夫妻に帰宅するよ

う促され、王様は男女の召使たちに先導されて内廷にお戻りになった。

67. スラバヤの姫オイの騒動

王様は2人の近習、ナヤトルナ Naya-Truna とユダカルティ Yuda Karti をお呼びになり、お命じになった。「ナヤトルナとユダカルティ、その方たち、パシシルと外領へ行け。余の妻となるにふさわしい女人を捜すのじゃ。しかし、行く先々の国でまず井戸の水の匂いをかぐのを忘れるでないぞ。井戸の水の匂いをかいでみて芳い香りであったなら、そこが美女のいるところ、この上なき女人のいるところじゃ。そしてその方たちは町も村もすべての女を集まらせるのじゃ」

ナヤトルナとユダカルティは「かしこまりました」と申しあげて出立し、ジュバラに行き、そこから東へスラバヤまで行った。そこで芳香のする水にであった。ナヤトルナとユダカルティは、プキック公の重臣でスラバヤの国事を任されているガベヒ・マングンジャヤ Mangun-Jaya を訪ね、陛下のご命令を伝えた。

マングンジャヤはユダカルティからご命令を聞くと、とても驚き、心の中で思った。「なんとしたことか。すでにアラーの思し召しによる宿命か、わが娘が王様に嫁するとは」。そして言った。「ナヤトルナ殿、ユダカルティ殿、拙者の見るところ、この国のどこを捜しても拙者の娘を凌ぐ女人はおりませぬ。貴殿らが女たちをすべて、村々までも含めて、呼びだされたとしても、何程の者はおりませぬ。しかしながら、娘はまだ成人しておらず、年頃の手前ですて、名はオイ Oyi ともうします」。マングンジャヤはこう言うと娘を呼んだ。ナヤトルナとユダカルティは現れた娘を見て、驚きのあまり、口をポカンと開けて見つめるだけだった。こうしてマングンジャヤに、娘を王様に差し出すこと、そして自身が妻とともにマタラムに娘を連れて行くことが命じられた。マングンジャヤは「御意のままに」と答え

て準備を整えた。すべてが整うと出立した。

ナヤトルナとユダカルティはマタラムに着くと、上司ガベヒ・ウィラルジャの屋敷に行った。これが娘らを王宮に案内し、王様に申しあげた。王様は娘を見てすっかり気に入り、惚れ込まれた。しかし障害は、まだ幼いことであった。そこでウィラルジャにお命じになった。「ウィラルジャ、この女兒をお前の家で面倒見よ、その美しさを磨くのじゃ。そしてよき年頃になったらクラトンに連れてくるのだ」。ウィラルジャは「御意のままに」と答え、娘はウィラルジャに連れられていった。

さて、パンゲラン・ディパティ・アノムはパンゲラン・シンガサリの妃と情を通じていた。シンガサリ公は気づかなかった。ところがシンガサリ公の妃には別に愛人がいて、名をラデン・ドブラス Dhobras といった。このドブラスは、プキック公の息子であり、アノム太子の叔父であった。シンガサリ公は、妻がドブラスと密通していることがわかり、とても腹を立てた。そして、アノム太子はシンガサリ公の妻がドブラスと通じていることを知ると、シンガサリ公に告げ口した。シンガサリ公は兄から密告されて、怒りはいや増した。そしてドブラスを騙して山の畑へ誘った。そこでドブラスを殺し、死体を窪みに入れ、高みにバナナの樹を立てた。

翌日プキック公は息子ドブラスを捜すよう命じられた。窪みの中にあるらしいと察すると、そこを掘って取りだした。その時ムラピ山が燃えだし、恐ろしい轟音を響かせた。無数の大きな岩がぶつかりあい、火花を散らした。まるで灰の雨が降るかのようであった。火砕流が川筋を流れ下った。多くの村がその下に埋まりまた燃えた。村人の命を落とす者が多く、マタラムの町の人々は火砕流と灰の雨に襲われて大混乱に陥った。そこで王様はハジたちとウラマーたちにアラーに祈るようお命じになった。するとたちまちムラピ山は鎮まった。このとき1594年であった。

その後まもなく王様は太子のアノム公をお呼びになった。太子が現れる

と王様はお話しになった。「おい、お前ももう大人なので、結婚するのがよい。今からチャルバンの国守の屋敷に行け。見目美しい娘をもっている。お前の妻とするにふさわしいと思える。まずはお前が見に行くのがよい。お前が気に入ったら、クラトンに招いてやる」

アノム太子は「御意のままに」と答え、チャルバン国守の屋敷に出かけていった。そこにくると招き入れられ座についた。チャルバンの国守はアノム太子が娘を見にお出でになったとわかっていたので、娘に飲み物とシリを運ばせた。太子は姫を見ると、心の中でその容姿が並外れて美しいことをほめたが、その表情にはいくぶん癡癡がうかがわれ、夫に対してわがままだと思えた。しだいに姫を見ているのが楽しくなくなっていった。そして帰宅すると父上に望まないと申しあげた。

ある日のこと、アノム太子は散歩していてウィラルジャ邸に立ち寄り、案内を乞うことなくブンドポに入ってしまった。さて、マングンジャヤのオイという名の娘はまさに適齢期に入っていて、その容姿はとても麗しかった。毎日身体の手入れをしているので、時とともにますます美しくなっていた。肌はウコンのような淡黄色で、容姿は優美で、すべての所作は非の打ち所がなく、表情は愛らしく、微笑みは蜜より甘かった。その時ちょうどブンドポでウィラルジャの妻と一緒にバティックをしていた姫は、太子のおいでになったのを見てびっくりした。オイはいそぎ座を離れて母屋に向かった。歩きながら何度も振り向き、また髪のを直した。

太子は姫を見てとても驚き、心臓はドキドキし体中の力が抜けてしまったようで、長い間呆然と眺めていた。そして激しい恋におちた。ウィラルジャは太子がおいでになっているのを見ると、急いでやってきて、足許に跪き、拝礼してお尋ねした。「殿下、いかなれば拙宅にお下がりになられましたのでしょうか。何かご所望でしょうか。どうぞ中にお入りください」。太子は答えた。「ちょっと立ち寄っただけ、そなたの家を見たかったのだ。

ウィラルジャよ、ちょっと尋ねたい。ついさっきバティックをしていた女性は誰か。そなたの実の娘か」。ウィラルジャは申しあげた。「殿下、あの女性はスラバヤの出身で、陛下のために閉居中であります。まだ小さい時に所望され、身共のもとに託されました。年頃になったらクラトンにお連れしなければなりません。いままさにその時がまいりました。陛下にお連れすると致しましょう」

太子はウィラルジャの言葉を聞くと、娘がいつそう恋しくなった。戻ろうと馬に乗り、早駆けした。王宮に着くと、ドドットを被って寝てしまった。従者たちはみなご主人様は病気だと思った。しかし、1人だけウィラルジャ邸の女性への恋煩いだと察した侍女がいて、急ぎプキック公に申しあげた。これを聞かれたプキック公は、災いが起こるのではないかと、とても心配になり、妃ラトゥ・パンダンに話された。「おまえ、わしは間違いを犯そうとしておる。さあ、ウィラルジャ邸の女性を受けとりにいこう。おまえの孫アノムに与えようではないか、恋煩いを終わらせてやるために。しかしわしの見込みでは、わしが実際にその女性を手に入れたなら、王様の怒りを買うことは避けがたく、死を賜ることであろうが、わしはもう歳をとったから、腹を括ったのだ。たとえ死ぬとしても、お前の孫が心煩うことから解放されさえすれば」。妻は夫の願いを受けいれた。こうして2人して、大勢の侍女を引き連れて輿をともなつて屋敷を出て、ウィラルジャ邸に着いた。

ウィラルジャは急ぎ前庭に出迎え、歓迎の言葉を述べ、邸内にお招きした。座につくと、ウィラルジャは拝礼しながら申しあげた。「殿下、いかなればここにお越しでございましょう」。プキック公はお話しになった。「ウィラルジャよ、わしがここにきたのは、そなたに知らせるためじゃ、わしの孫のアノム太子がそなたの屋敷から戻ってこの方、まったく食べようとせず、ただ横たわっておる。もう何日にもなる。この屋敷にいるスラ

バヤの女性にすっかり惚れ込んでしまったためだ。わしはそなたの許しを求める、その女性をわしにくれ、太子と結婚させるのだ。もしも王様がご立腹になったなら、わし1人が責めを負う。たとえ命を失おうとも、実現するつもりだ」。ウィラルジャは答えた。「殿下、あなた様のその願いをお断り申しあげます。身共はあなた様の息子なる王様を恐れます。もしあなた様が連れて行かれれば、王様から死を賜ることでしょう」

スラバヤ公はこの答を聞くとがっかりして、腕を組み、そして静かに言った。「ウィラルジャよ、そなたの言うことはまったくそのとおりだ。しかしそれでもわしは、王様の怒りを買おうとも、たとえ命を失おうとも、1人でやり遂げ、そなたを巻き込まない。それにこの1000〔リアル〕の値打ちの指輪1組と2振りのクリスを差しあげよう。さあ受けとってくれ」。ラトゥ・パンダンが言い添えた。「ウィラルジャ殿、そもそも妾の者をお返しください。スラバヤの国は妾のものであり、その女性はスラバヤからきたのですから、妾にその資格があるのは間違いありません。わが子なる王様がお怒りになりましても、妾が引き受けます」。そしてラトゥ・パンダンはウィラルジャの妻に語りかけた。「奥方様、妾のこの贈り物をお受け取りください、金と財宝と着物です。ご家族でお分けください」

ウィラルジャの妻は喜び、拝礼して受け取った。そして夫に言った。「あなた、なぜ何もおっしゃらないの。あなたが王様を恐れられるとしても、このようにプキック殿下とラトゥ殿下が保証して下さるのですから。それに私が思いますに、王様はお怒りにはなりません。所望されるのがご自身の王子様で、王位に就くのが決まっておられるお方ですし、私は昨日耳にしましたが、太子様は王様であるお父上から結婚を勧められておいでです」。ウィラルジャは妻の言葉に流され、姫はプキック公に引き渡された。プキック公夫妻は素早く姫を引きよせ、手を取って横に座らせた。プキック公はウィラルジャに言われた。「ウィラルジャよ、聞きなされ、マ

タラムの国がこの女子のために破滅するのはアラーの思し召しにより定められておる。王様の怒りに触れてそなたは惨めな目を見るであろうし、わしは死ぬことになる。しかしこうしたすべてはアラーの思し召しによる定めであって、免れることはできないものなのだ。さらばじゃ、家に戻るとしよう」

プキック公夫妻は屋敷を後にし、オイ姫は輿に乗って連れられていった。王族の区域に入ると、孫に会い、プキック公は語りかけられた。「アノムよ、もはや恋煩いはおしまいになさい。その病の特効薬を見つけてきたぞ。これを見よ」。太子は姫を見て大喜びし、心の高まりにたえられず、姫の横にきて座った。スラバヤ公は申された。「孫よ、お前は心配することはない。お前の父なる王様がお怒りになったとしても、わしが引き受けてやる。たとえ命を落とすことになるうとも、お前が喜び幸せでありさえすれば、わしが引き受けてやる。では、愛しあうのじゃ、わしは戻るとしよう」。太子は拝礼して感謝を述べ、プキック公夫妻は戻っていった。姫は太子の腕に抱かれ、寝室に連れられ、思いが達せられた。

それから間もなく王様はウィラルジャに娘をお求めになった。ウィラルジャは、すでにプキック公に取り上げられ、太子に与えられたとお答えした。王様は激怒なさった。スラバヤ公は殺され、その一族も全部で40人がすべて殺された。そしてウィラルジャは妻子とともにプラナラガに追放になり、そこで殺された。そして太子は父から、自分の手でその娘を殺すよう命じられた。もし太子がオイ姫をただちに殺さないならば、もはや自分の子とは認めないと。太子は父のこうした命令を受けると、深く悲しんだ。そして、姫を膝に抱き、クリスで刺し殺した。姫の死後太子は父によりリブラに追放になった。財産はすべて取り上げられ、屋敷は焼き払われた。

68. トルナジャヤがサンパンに戻り、マタラム攻撃を準備する

その時すでに王様は欲望に身を任せ、常軌を逸しており、暴力が繰り返され、見せしめのための刑罰が頻繁に執行された。ブパティたち、マントリたち、王族たちがたがいに地位を奪い合い、王国の秩序はすっかり混乱してしまった。マタラム中の人々がみな不安になった。しきりに月食と日食がおこり、時季ならざる雨が降り、夜毎にまがまがしい彗星が現れ、灰の雨が降り、地震があった。数多い凶兆が現れ、そのすべては王国の没落を予言していた。

アノム太子はすでに父から赦され、もとのように太子の館に住まうようになったが、悲嘆の思いを断ち切ることができなかった。祖父ブキック公とその家族の死を悔やみ続けていた。そしてマタラムの町の人々もまたみな悲しみに沈んでいた。王族たちやブパティたちから、マタラムの国の人々みなを安寧にするために王位に就くようしきりに促されていた。アノム太子の立場はますます苦しくなり、自問するのだった。「仮に父を倒したりしたら、他国に対して聞こえが悪いが、すぐにでも王として立たないならば、その間にマタラム人はみな倒れてしまう」

こうして考え出したのは、誰かを隠れ蓑にしてマタラムを征服することだった。太子は祖父、カジョラン Kajoran のパヌンバハンを思いつくと、こう独りごちた。「マタラムの征服を命じるとしたら、カジョランの祖父以外にありえない。苦行を重ね、霊力のある人なのだから。隠れ蓑として使うならきつとうまくいくだろう」。太子はこうして配下の3人のルラ、プラナ・タカ Prana-Taka, スムンディ Sumendhi, アンダ・カラ Anda-Kara を呼びになった。太子はこう命じられた。「お前たち3人はカジョランへ行け、この手紙を祖父に渡すのだ。この手紙の他に、お前たちに指示する。黙ってお前たちについてきてくれるようお祖父様を説得するのだ」。

3人は太子の考えを打ち明けられ、「かしこまりました」と出立した。

さて、カジョラン公であるが、たいそう霊力が強く、厳しく瞑想に励んでいた。そしてサンパン出身のラデン・トルナジャヤ Truna-Jaya という養子がいた。実父はサンパン国守ディパティ・チャクラニングラット Cakra-ning-Rat の兄、ドゥマン・ムラヤであった。ムラヤは、パンゲラン・アリットとの戦いですでに死んでいた。父が亡くなったとき、トルナジャヤはまだ小さかったので、ムラヤの国守の地位は叔父チャクラニングラットが継いだ。トルナジャヤはその屋敷に一緒に暮らしていたが、成人すると、チャクラニングラットの姫と親しくなったと疑われたため放逐された。のみならず、殺されかけた。生き延びることができたのは、サンパンの人々の多くから慕われていたので匿ってもらえたからだった。そこでトルナジャヤはアノム太子に仕えようとしたが、うまくいかなかった。トルナジャヤが太子の前に出ることがないようにと、チャクラニングラットが太子の家臣たちを抱き込んでいたからである。こうしてトルナジャヤは放浪の旅にでた。やがてカジョラン公に養子として受けいれられ、たいへん寵愛され、何をしてでも許された。というのもカジョラン公は、トルナジャヤが将来ジャワの国を混乱させることができる偉大な武将になることがわかっていたからである。

その時カジョラン公はちょうど家において、パンゲラン・ディパティの使者がくるのを見て驚いた。使者は手紙を携えていた。カジョラン公は手紙を読むと、マタラムにむけ出立し、トルナジャヤは義父に随行した。マタラムに着くと太子を訪ね、その屋敷に招じ入れられた。太子はこう切り出した。「お祖父様、あなた様にここにおいでいただいたのは、私がつたいへん困惑し懸念しているからです。といいますのも、マタラムの人がみな困っています。父上の望まれることが以前とは異なって、すべてにおいて錯乱してしまい、むやみに刑罰を課され、国中の人々が破滅させられています。

そのため、王族たちやブパティたちがみな、父上に代わって王位に立つよう熱心に勧めるのです。かといって、お祖父様、もし私が父上を退けたりしたら、私に反感を抱く者たちは何と言うのでしょうか。もし私が王位に就かなければ、全マタラムの人々がまもなくみな倒れてしまいます。こういうわけで、私はいまこのような考えを抱くようになりました、お祖父様、私はあなた様を隠れ蓑としてマタラムの国を獲得しようと。どうぞどこなりとお好みの場所に大軍をお集めください、そのための資金と武器は私が提供いたします」

カジョラン公はこうお答えになった。「若殿、そなたの願いに沿うことはできぬ。わしはすでに老いたし、王様が怖いゆえ。そのうえ、そなたの願いは順当とはいえず、時を飛び越えるものと判断できません。わしの考えでは、じっと我慢にしかず。このまま進めば、王様が亡くなられたなら、後を継ぐのはそなたに間違いないのじゃから」。カジョラン公は言葉を尽くして諫められたけれども、ついに説得できなかった。こうしてカジョラン公は申された。「そなたがそれほど固執するなら、若殿、わしの代わりの者を世話しよう。わしに義子があり、トルナジャヤという。亡きサンパンのドゥマン・ムラヤの王子である。この者がきっとそなたの求めに応じることができ、そして、マドゥラで兵を挙げことができよう。そのトルナジャヤは一緒にきていて、いま外におる」

太子は喜んで、トルナジャヤを招じ入れた。トルナジャヤは太子の前に現れると、拝礼した。太子は嬉しげにトルナジャヤをご覧になった。カジョラン公はトルナジャヤに申された。「よいか、お前が召されたのは、お前がご主人様の替え玉になってマタラムの国を征服することが望まれているからだ。もし失敗したら命はないだろう。どうかな、ご主人様の替え玉となることを引き受けるか」。トルナジャヤは「喜んで、やりましょう。たとえ命を失い、粉々になって土に帰そうとも、ご主人様の命令を実行し、

逃げませぬ」

太子はトルナジャヤの約束を聞いておおいに満足なさり、こう申された。「トルナジャヤ、そなたにサンパン国を与えよう。自ら伐り従えよ。マドゥラ人をすべて留まらしめて、マタラムに姿を現すのを許してはならない。ブパティたちについては、マタラムに留ませよ。挙兵したなら、ただちにパシシルや外領の者どもを屈伏させるのだ。逆らう者がいれば、武力で倒せ。しかし忘れてはならぬ、余が後ろにいることを隠し通すのだ。マタラムが支配下に入った暁には、ただちに余の前に現れよ。余がすでに王位に就いたなら、全権をそなたに与えよう。余はただ王位に就けばよい、ジャワの国の困難はすべてそなたに委ねよう」。トルナジャヤは「かしこまりました」と答え、太子から財宝、衣装、様々な武器を賜った。

カジョラン公とトルナジャヤは太子のもとを辞すとカジョランに戻り、準備万端整えた。カジョラン公は指示した。「よいか、お前に伝えておく。心配することはない。マタラムの国はきっとマドゥラ人によって征服されるだろう。お前は直ちにスラバヤにおいて兵を挙げよ。いずれマタラムが混乱したなら、わしはお前の後に続く」。トルナジャヤは心得ましたと答えて、ただちに妻子とともに出立した。サンパンに着くと大勢が喜んで出迎えにきた。この方こそ旧主なのだから。マドゥラの全島あげてみな服従し、逆らう者はいなかった。トルナジャヤは早くも大軍を有した。